

「普遍」から「通底」へ

— 人類文明の危機と日本の役割 —

服部 英二

本稿は、去る平成二十二年二月二十一日、京都新都ホテルにおいて、道徳科学研究センター顧問の服部英二教授が平成二十一年度アカデミア賞を授与された際に行われた記念講演の記録です。この賞は、終戦直後の昭和二十四年、京都大学教授陣を中心として創設された日本学士会により、「我が国および世界の文化・社会・国際交流の各分野において著しく貢献したものに授与される」ものです。二十一年度の同時受賞者は、尾池和夫教授（京都大学前総長）およびケント・E・カルダー教授（エドウィンライシャワー東アジア研究所所長）、二十二年度は、森本公誠博士（東大寺長老）が受賞されました。（編者注）

このたびこのような歴史ある賞を受賞いたしましたことを、誠に光栄に存じております。

思い返せば、今は半世紀も昔、よく吉田山を散策し、思いにふけておりました。そのころの恩師のお顔が目に浮かびます。西谷啓治先生、高田三郎先生、野田又夫先生、田中美知太郎先生、三宅剛一先生、そのどなたも今や御存命ではないのですが、そうした先生方と私たちの間には、指導教官と



学生というよりは師弟関係と呼んだほうがいい雰囲気があったと思います。

昨今の大学の現状を見るにつけ、かつての京大総長、西島安則先生を会長にいただくこの学士会は、一九六八年のいわゆる大学紛争の前の、そのような伝統を残すものと感じております。

私を親しく指導して下さったこうした先生方の期待を、あるいは私は裏切ったのかもしれませんが。フランス留学のち大学に帰らず、国際機関に入ったからです。しかし今、自らの来し方を振り返る時、私に悔いはありません。ユネスコという国連機関でなくては出来ないものがあつたからです。

ユネスコとは何よりも国際世論を創出するフォーラムです。そこで生まれた新しい理念は、池に投じられた一石のように波紋を描いて広がって行き、やがて世界の常識となり、すべての民族の生き方を変えていきます。例えば七〇年代初頭に提唱された「生涯学習」あるいは「世界遺産」のような考え方は、今や一般の人々の生活の中に定着しています。

一九八〇年代、私は「シルクロード・対話の道総合調査計画」を立案し、その核として「文明間の対話」という新しい概念を提唱しました。草原の道、オアシスの道、海の道に出した国際遠征隊にもまして、三〇カ国、二〇〇〇人の学者をこのプロジェクトに惹きつけたのはこの一つの言葉でした。

ところが一九九一年一月、海の道調査の最中に湾岸戦争が勃発します。全世界がイラクを非難する中、ただ一人、それを「第一次文明戦争だ」と喝破したのはモロッコのマーディ・エルマンジャラでした。この言葉に触発されたアメリカのサミュエル・ハンチントンは「文明の衝突」論を唱えました。この衝突不可避論がメディアで増幅されていくのに危機感を抱いたイランのハタミ大統領（当時）は、ここでユネスコ・シルクロード・プロジェクトのキーワードを国連総会に訴え、二〇〇一年が「文明間の対話・国際年」に指定されたわけです。以来この言葉は万人の口にするものとなりました。

しかし世界の現状を見ると「文明間の対話」のその真意は、未だ理解されていないように思われます。なぜならば十九世紀の西欧に生まれた文明一元論は、未だに根強く残っており、諸々の文明の存在を認め、異なった価値を尊重し、そこに学ぼうとする態度は、一部の人々を除き、未だ全人類の共有するものとはなっていないからです。文明Ⅱ 西欧文明Ⅱ 科学技術文明とする見方が人類史の近代を律してきたことはいなめません。そして人々は、文明とは出会いによって生成するものであることを忘れていきます。文明は生き物のように動き、他者と出会い、子を孕み、そこに新たな文明が生まれます。ヨーロッパ文明も、日本文明と同じく、多くの他文明との出会いによって形成されたものですが、近代の一時期、西欧は「他のおかげで」形成された、ということを拒否しました。あたかも一つの啓示宗教が他の影響を認めないように。

秀れた比較文明学者である伊東俊太郎氏の人類五大革命説によれば、人間革命・農業革命・都市革命・精神革命が世界各地に「同時多発的」に起こったのに対し、それに続く十七世紀の第五の革命、科学革命だけはヨーロッパという一つの地域で起こっています。それは何故か、を問わねばなりません。この科学革命がやがて産業革命となり、それがヨーロッパを地上で突出した地域、すなわち世界の覇者といわれるものに仕立てていくのですが、この現象は実は、ルネサンス以来、西欧が体験した

自然科学と宗教との間いと無関係ではない、と私は見ております。この熾烈な闘いは、二重真理説となり、更に「科学は価値を問わず」Value Freeの立場を創り出します。真理は科学、倫理は教会という棲み分けであります。文化とは価値のシステムでありますから、ここに科学と文化の乖離が起りました。そしてこれこそが文明の危機を創り出したものであります。この科学と文化の乖離こそが、かつては植民地主義を正当化し、多くの民族を隷属の次元に置き、その希望を奪い去ったのみか、今は、地球そのものを破壊の危機に追いやるに至ったものの根源にある、その思いが一九九五年のユネスコ創立五〇周年記念シンポジウムとなります。

一九九五年、ユネスコと国連大学が共催したシンポジウム「科学と文化——未来への共通の道」に参加した世界的科学者たちが、自ら起草し、最終日に満場一致で採択された「東京からのメッセージ」は、次のように述べています。

「十九世紀にピークに達した機械論的科学は、非情な観察者をその研究の対象から切り離す立場をとった。これが盲目的な進歩の概念を生み、また物質的な文明観を助長した。その結果、二つのイデオロギーが対立することとなった。一つは文明の画一化（グローバル化）による技術的な〈進歩〉の概念であり、それに対するものは、多様性を尊重し、文化的アイデンティティと価値を保持せんとする立場である。これら二つの強力な考え方の背後には、〈科学〉と〈文化・伝統〉は相容れないものであり、越え難い深淵によって隔たれている、という、検証されなままの思い込みがあった。」

続いてこう述べています。

「われわれはこう信じる。この表面的な相反は、過去三〇〇年にわたって——それは人類史から見ればたったの一万分の一の時間帯であるが——西欧の科学がかつては抱いていた全一論的(holistic)な自然観から離れていったことに起因している。この科学の動きは、機械論的にして価値を問わないことを特徴としており、それは物質的、技術的な富を生み出したが、ますます専門化と細分化を進めることとなった。」

そして更にこれに続き、驚くべき事実が告げられます。

「二十世紀の間に、実験による諸々の発見を基に、先端の科学者たち——哲学者や神学者ではない——は過去三世紀の間使われていた前提を覆し始めた。この反転は量子物理学者の創始者たちがリードしたもので、彼らは、宇宙にはかつて科学が放棄した昔からの宇宙観に近い、全一性(Wholeness)の秩序が存在することを発見したのである。」

そして東京からのメッセージは、最後に、人間の理性が宇宙の全一論的見方に進んでいく、新しい啓蒙の時代の到来を告げるのです。

「この新しい啓蒙の特徴の核心は、へ多様性の中の統一への全く新しい角度からの評価である。自然科学と人文科学の学者たちは、長い間、最初は美術に現れる一つの考えを抱いていた。すなわち全体はその部分の総計よりも大きく、またその総計とは違う、というものである。この考えによれば、構成要素が特別の配列で集まり、全体を形成するとき、新しい属性が現れるのである。しかし今日、科学が明らかにしたのは、全く異なった宇宙の全一的相の存在である。この新しい

全一論によれば、全体は部分の中に包まれ、部分は全体に行きわたっているのである。」

これを私は「全は個に、個は全に遍照する」と訳しました。

科学の最先端に位置する人々によるこの言明は極めて重要であります。ここに引用した最後の文章が明かすのは、彼らの宇宙観が、伊東俊太郎がいう「精神革命の時代」、すなわちヤスバースが『歴史の起源と目標』の中で「枢軸の時代」と呼んだ前八〜四世紀に、世界各地に現れた精神的指導者たちの会得したもので、更にそれを深めていったその後継者たちの悟りというものに非常に近い、ということです。学問の世界からは遠く、しかし無意識のうちにそれを生きている人々もいます。その口からは「おかげさまで」「もったいない」「ありがたい」という言葉がよく自然に発せられます。

この東京シンポジウムを開くにあたって、その二年前から私は、当時日本ユネスコ国内委員会会長であった西島先生とご相談を重ねました。そして「東京からのメッセージ」は仏教を知らない欧米の科学者によって起草されたものであるにかかわらず、日本側の参加者（西島先生に加え、河合隼雄、中村雄二郎、鶴見和子の三氏）との対話によって、新しい科学の抱く宇宙観は曼陀羅の思想に近い、と明記されたのでした。いま私はこれが、古くはウパニシャッドの「梵我一如」、更にイスラームの「タウヒード」の概念とも結ばれる、と申し上げたい。なぜならイスラームにおいて根源的なこの言葉は、単に「政教不二」を指すのではなく、「神が万有に顕現している」との遍照の宇宙観を現すものだからです。それは「一切即一、一即一切」を説く華嚴経とも通底するものであります。

デカルト以来、主客を峻別した科学は自然を対象化し、細分化してきました。なぜなら機械論的の世界観では対象たる自然は部分に細分化出来るものだったからです。専門化とはその細部を見、分析することでした。その細分化の過程で古代の知恵は失われました。しかしながら最先端の科学のおかげで、われわれは再び「万有相関」の実相を、そして主観さえも客体との相互作用の中に位置すること

を、知ることが出来るようになったのです。

私自身が関与したユネスコの知的協力活動の中では、既に一九八六年、世界に衝撃を与えた「ヴェニス宣言」が、「科学はその独自の歩みの中で、世界の文化伝統と再び対話できる段階に達した」と指摘しています。

現在世界の多くの国々は、人類の唯一の住処である地球環境の急速な破壊を食い止めようと立ち上がりました。気候変動と温暖化、森の減少と砂漠化、近く到来する水・食料の不足、化石燃料をはじめとする地球資源の枯渇等が議論されています。『地球との和解』という最近のユネスコの出版物の中で、前事務局長松浦晃一郎氏は、「砂漠化は今や世界の陸地の三分の一、四十億ヘクタールに及んでいる。二十世紀の終わりの時点で、一一〇ヶ国、約十億人の人々が押し寄せる砂漠に脅かされていたのだが、この数字は二〇五〇年には倍増し、二十億人が脅かされることとなる」と述べています。そして、過去の平均値より一〇〇倍の速さで生物種が絶滅していく現状に注意を促し、「生命の再生産にとっては多様性が肝要であるのに、二二〇〇年には五〇パーセントの種が姿を消す可能性がある」と指摘しています。

この地球の砂漠化は、人間の「精神の砂漠化」に由来する、と私は申し上げたいのです。科学革命以来、人間像に歪みが生じた、全人性が失われたことが根本にある、と。

自己以外のすべてを客体化するのが近代的思考でした。その結果、人間の関心は「存在」*Être*から「所有」*Avoir*⇒*to have*に移っていきます。そしてヒトさえもモノとして扱われるようになりました。すべてが数量化されていきます。すべてがお金で表示されるもの、すなわち所有の対象であります。この延長にグローバリズムのシンボルたる市場原理主義があります。毎日一兆ドルもの電子マネーが地表を飛びかい、精神の砂漠化に拍車をかけているのです。

現在注目されている多様性の哲学は、人と地球を破滅に導くこのグローバリズムに厳しく異を唱え

たものです。二〇〇一年、ユネスコ加盟国は満場一致で、世界人権宣言に次々と評価された重要な宣言を採択しました。「文化の多様性に関する世界宣言」です。その第一条には、「自然界に生物多様性が必要である如く、人類の生存には文化の多様性が不可欠である」と明記されました。そして昨年亡くなったレヴィー・ストロースは、その遺言ともいべき二〇〇五年の講演で、「文化の多様性と生物多様性は、単に類似しているのではなく、有機的に結ばれている」と証言しています。われわれの文明が単一化に向かえば、それは人類の衰退を意味します。そして現実の世界は確実にその方向に向かってしていると認めざるをえません。

文化の中核と言ってよい言語をとってみても、現在二八〇〇の言語が消滅の危機にあります。一つの言語の死は一つの文化の死を意味します。過去一世紀の間に半減した言語は、このままで行くと、あと一世紀で更に半減する運命にあるのです。しかるに経済至上主義は、英語という一つの言語の世界制覇と共に、諸民族の文化をも画一化しつつあります。

人類の文化の画一化は人類の凋落であり、その終末を告げるものと言って過言ではありません。私はこのような画一化が、東京からのメッセージが言明しているように、過去三〇〇年というごく短期間に起こっていることに注目したいのです。それは科学技術の進歩を人間の進歩とした時代、理性至上主義の時代に起こった特殊現象であります。

二〇〇五年、パリで開かれた、ユネスコ創立六〇周年記念シンポジウム「文化の多様性と通底の価値」（道徳科学研究センター・UNESCO・国際日本文化研究センター共催）、二〇〇七年東京で行われた「文化多様性の新しい賭け——対話の中に通底の価値を探る」（道徳科学研究センター・UNESCO・国連大学共催）を通じて明らかにされてきた課題の中に、啓蒙時代と「普遍」の概念の見直しがあります。

啓蒙時代とは人間の諸能力の内、理性のみに至上に価値を与えた時代であります。確かにそれは、

産業革命を生み、知の領域を広げ、物質文明に画期的進歩をもたらしました。しかし同時にそれは、差別の原理となっていたのです。それは女性・子供を差別しました。理性を完全に使用できない、と見做されたからです。そしてそれは非西欧人のすべてを差別しました。彼らは理性・感性・靈性を混然一体として生きている、すなわち理性的存在となっていない野蛮人とみなされたからです。

「普遍」Universalの概念は、この理性至上主義と呼応するものです。それは従って、理性的・男性的・西欧的概念です。Uni||一つに、verso||向かう、がその意味するところです。その一つとは既に設定された一つの価値であり、そこに収斂するものが普遍である、ということが前提されています。それは上下関係を創ります。普遍が上位、特殊が下位です。植民地化された諸民族の多様性は、この特殊に位置づけられました。

新しく浮上してきた「通底」Transversalという考え方は、普遍とは逆に、すべての文化を対等に尊重する立場をとります。それは個人を扱うに当たって、一人一人の人間が、人種的・社会的・経済的・性的・年齢的な差異こそあれ、人間の尊厳においては等しい、とする、基本的人権の理念にも呼応するものです。

それは反理性主義ではありません。新しい理性主義です。近代において軽視されてきた感性・靈性と響き合う理性、人間の全人性の回復を目指すものであります。このアプローチによってこそ異なる文化を生きる人々との間に「互敬」の関係が生まれるであります。森羅万象に神が宿るとするアニミズム、すなわちヘーゲル・マルクス史観によつて原始宗教とされた宇宙観も世界的に見直されるであります。かつて葬り去られた母性原理は蘇り、すべての文化伝統の深みに通底する価値が見出されるであります。東アジアの豊穡の三日月地帯、すなわち日本からインドネシアに至る海のアジアは、とりわけ母性原理を生きてきた地域であります。その文化とは水の循環に大いなる生命の循環を見る文化であります。人間を自然と対峙させず、その一部と見る文化、人の和が個人に優先す

る文化、理性・感性が相呼応する文化を、ここでは和辻哲郎が「命の風」と呼んだモンスーン地帯という風土が育んできました。

しかしこの母性原理は地球のこの地域だけに特有なものではない、と知らねばなりません。地中海文明・ケルト文明・マヤ文明・インド文明・エジプト文明等そのすべてに本来は存在していたものであります。そのことは各地に残された渦巻き状の文様に見てとれます。ヨーロッパでも聖母信仰の形で「大地母神」の復活がみられます。

エデンの園には大切な二本の樹が生えていました。生命の樹と知恵の樹です。文明史とは、知恵の樹の実を食した人類が、蛇の告げた通りに「神のごとく」になり、大地とすべての生き物を支配し、神によってその園におかれたもう一つの樹、生命の樹を忘れてゆく歴史であった、と言えましょう。

地球を破壊してきた力の文明に代わる文明、我々が地上に今、創りださねばならない文明とは「生命の文明」であります。山川草木に仏性を見、命の継承を至上の価値とする母性原理を生きてきた日本文化の果たす役割は極めて大きいと言わねばなりません。しかしながら、ここで排すべきは、かつて行われたような「東西」という無益な対立概念です。他者という観念を根底から変えなければなりません。

「文化の多様性宣言」が明らかにした通り、他なる存在、それは今や敵ではなく、単なる「寛容」の対象ではありません。それは自己の存在にとって不可欠なもの、自己を今ここにあらしめてくれているものです。欧米もまたわれわれの中に生きております。常に自己批判をいとわない西欧の強靱な知性は、絶えず根源に帰る能力を秘めています。エコロジという学問を生み出したのも西欧です。ユネスコでも使われる *Coevolution* という最近の言葉は「共生」の深い意味を表しています。

もし人類が、今自らの過去に学び、本来の全人性を取り戻すことが出来れば、人類は再び地球と共生し、目前にせまった危機を乗り越えることができるでありましょう。われわれが直面している危機

は、人類文明の危機であります。これを乗り越えるべく、われわれの目指す「知の社会の構築」とは Scientia (知)ではなく、Sapientia (智)の再発見、すなわちソクラテスが体得し、プラトンがアカデメイアで説いた Sophia に結ぶものがあります。

(*西島安則先生は、二〇一〇年九月に急逝されました。ここに謹んでご冥福をお祈りします。)